

三陸鉄道開通！初めての被災地へ！

2019年7月ツアー行程

1日目	たろう観光ホテル まなぶ防災ツアー 浄土ヶ浜 大槌・風の電話 大槌宿泊（六次工）
2日目	三陸鉄道リアス線（大槌駅→鶴住居駅） 釜石・鶴住居復興スタジアム、津波記憶石 三陸鉄道リアス線（釜石駅→浪板海岸駅） 大槌散策、現地の方との交流 陸前高田・奇跡の一本松 陸前高田宿泊（二又復興交流センター）
3日目	気仙沼・リアス・アーク美術館 解散

概要

私たちは、七月五日から七日にかけて、東日本大震災による津波で被害を受けた地域に訪れた。主な訪問地は、岩手県宮古市と大槌町である。このツアーには、新入生三名を含む計十一名が参加した。ツアーは、被災した地域を巡ったり、現地の人と関わったりしながら、現在の東北の姿を学ぶという趣旨のものである。

▼ツアー行程…左表参照
▼訪問先…二、三面記事参照
▼ツアー参加者の感想…四面記事参照

振り返り

一日目、私たちは盛岡駅を出発し、岩手県宮古市田老を中心に巡った。特に、まなぶ防災ツアーで訪れた「たろう観光ホテル」が印象的だった。被災した姿のまま保存されており、津波の恐ろしさを物語っていた。夜は民宿に宿泊し、現地の美味しい料理を頂いた。食事後に参加者の感想を共有し、「震災の爪痕を身近に感じた」などの声が上がっていた。

二日目は、大槌町や釜石市、陸前高田市に訪れた。大槌町では、現在も仮設住宅で暮らしている方や震災後の大槌町で町長を務めた方からお話を伺うことができた。



▲たろう観光ホテルにて説明を聞く



▲待ちに待った三陸鉄道に乗車

また、震災後長らく不通になっていた区間の三陸鉄道リアス線に乗りできたのは印象的であった。ツアー最終日の三日目は、震災当時の写真や被災物を展示している「リアス・アーク美術館」に訪れた。展示は情報量が膨大で、被災物の背景にある、人々の被災前の暮らしや被災後の苦しみ等を想像すると、二時間弱の滞在では到底消化できるものではなかった。しかしながら、その情報量の多さこそ、津波で奪われた暮らしがどれだけあったかを表していると感じた。私たちはこの美術館で、改めて津波の影響、恐ろしさを深く心に刻み、充実した三日間のツアーを終えた。

2019年7月
ツアー号

【発行者】
東日本きずなプロジェクト

参加者 (init.)	学年
C.N.	B1
R.Y.	B1
S.S.	B2
H.K.	B3
N.I.	B3
S.Y.	B3
Y.O.	B3
A.T.	B4
H.K.	B4
E.Y.	M1
K.O.	M1



2019.11.03-05@ 第15回みやこ祭
(首都大学東京 大学祭)

東北名物笹かまぼこ
津波被害から復活の地酒

東北の魅力を、首都東京で

震災を学び、
東北の魅力に
ふれる



東日本きずなプロジェクト



訪問地

今回のツアーでは、大槌町以外にも多くの場所を訪れた。訪れた場所と、特に知っていたいただきたい三つの場所について詳しく紹介する。

たろう観光ホテル

一九八六年から営業されていたホテルに津波が押し寄せた。四階まで浸水し、二階までは鉄骨がむき出しの状態になっている。津波遺構として保存され、整備が進む町の中にぽつんと建っていた。今回参加した、まなぶ防災ツアーでは、六階で津波襲来の瞬間の映像を見た。



浄土ヶ浜

三陸鉄道リアス線
釜石駅
——
鵜住居駅
——
大槌駅
——
浪板海岸駅

大槌町（左面へ）

奇跡の一本松

三陸鉄道リアス線

釜石鵜住居復興スタジアム

二〇一九年に開催されるラグビーワールドカップの会場となる新スタジアム。
「釜石の奇跡」で有名なとなった小中学校の跡地に建設された。貯水槽や避難道があり、防災が徹底されている。最寄りの鵜住居駅前には、慰霊碑や交流館がある。



▲鵜住居駅前の慰霊碑

リアス・アーク美術館

「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示がある美術館。二年間の独自調査記録資料が展示されている。写真や被災物が並び、学芸員が調査した際に感じた生々しい現場の様子を知ることができる。展示情報量が充実していて、非常に見応えがある。



東日本大震災の全体像

東日本大震災は二〇一一年三月十一日に発生し、三陸地域を中心に甚大な被害をもたらした。観測史上最大規模の地震に加え、最大で高さ二メートル、遡上高四メートルを記録した津波が被害を極めて深刻なものとした。犠牲者・負傷者数といった人的被害や倒壊等の物理的被害のほか、産業や経済、地域のコミュニティ、行政自治体へのダメージといった社会的被害も多岐にわたった。また、生存者の心理的なダメージも計り知れない。家族や親しい人を失ったことによる精神的傷、助かって「しまった」ことに感じる罪悪感などに対する心理的なケアは現在も必要とされている。

発災から八年半が経った今もなお、残っている傷痕はあまりに大きい。

死者 （震災関連死）	15,897人 (3,723人)
行方不明者	2,532人
避難者（発災直後） 同（2019年7月10日現在）	約47万人 約5万人

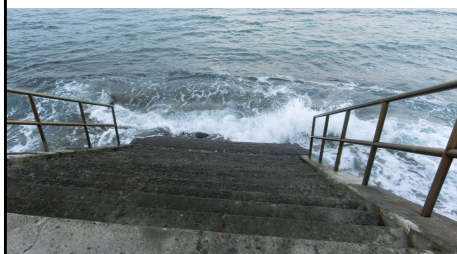
死者・行方不明者数は2019年6月10日現在
震災関連死者数は2019年3月31日現在
（復興庁・警察庁資料をもとに作成）

岩手県大槌町

大槌町は岩手県陸中海岸中央から少し南に位置する、人口およそ一万二千人（二〇一九年六月現在）の町である。主に水産業が盛んで、人形劇「ひよっこりひょうたん島」のモデルとされる蓬萊島を望む風光明媚の地として知られる。

浪板海岸

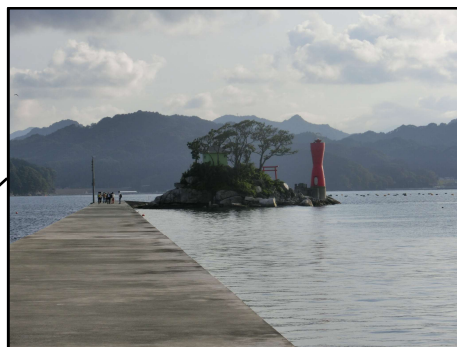
かつては砂浜海岸だったが、地盤沈下で海の中に沈んだ。そのまま水面へとつながっており、異様な光景になっている。今後、砂浜を再生するための取り組みが始められる予定である。



風の電話

電話ボックス内に電話線の繋がっていない黒電話とノートが置かれている。来訪者は、普段胸にしまっている亡き大切な人への思いを電話越しに伝えたり、ノートに気持ちを綴ったりできる。

蓬萊島



おしゃっち

二〇一八年にできた大槌町の文化交流センター。図書館や会議室、多目的ホールを集約した複合施設である。二階には震災伝承の展示室があり、震災直後の街の風景を映像で見ることなどができる。



大槌駅

三陸鉄道リアス線の駅。津波によって駅舎が流失し、鉄道も休止してしまっただが、二〇一九年三月二三日に営業再開した。駅舎デザインは、住民投票の結果、三〇個の案の中から蓬萊島をモチーフにしたものに決定した。



大槌町と東日本大震災

東日本大震災において、最大二メートルの津波が襲い、死者計二八六八（二〇一九年六月十一日現在）、全壊家屋三〇九二棟という甚大な被害を受けた。また、当時、災害対策本部の対応にあたった当時の町長含む町職員三九名が津波に巻き込まれて犠牲になるなど、行政機能は麻痺した。

役場機能を別の場所に移動させた後、被災した旧役場庁舎は、震災遺構として保存される方針だった。しかし、二〇一五年の町長選にて、解体を公約に掲げた候補が当選したことをきっかけに解体されることになった。「保存か解体か」を巡り、住民意見も割れるなか工事に着手し、工事差止めを求める住民訴訟に発展するなどしたが、最終的に二〇一九年三月に解体工事が終了した。



参加者の声

東日本大震災から8年がたったが、現在の状況はどのようなものなのか、現地の方に話を聞く機会があった。当時の被害状況や復興について多くの話を聞くことができたほか、近年では、子育てについても問題があることも聞いた。地震の被害などもあり、若者が少なくなっている、その結果、母親になった人が同年代の母親たちと一緒に相談したり、子育てをしたりすることが難しくなってきたという問題だ。話をしてくださった方は、このような問題を解決するため、母親たちで集まることのできるコミュニティを作っているという努力が今回分かった。

小学校・中学校の教科書にも東日本大震災について被害状況などが載ることはあっても、このような問題がとりあげられるというのは、なかなか少ない。これからこの震災について知らない人も増えていくが、このように形に残していくことで多くの人に知ってもらえる良い機会になればと感じた。

大槌のツアーに初めて参加した。ツアーでは、毎晩その日の振り返りを行う。地元の人と似た感覚での「建物は次第に建ち始めている」という上級生の感想や、新入生の「『復興と復旧は違う』という地元の人の中に驚いた」という感想が特に印象的だった。

ツアー中は、個人的に3回ほど行ったことのある陸前高田や気仙沼と大槌を比較することがあった。大槌では、震災以前とほぼ同じルートで鉄道が再開するなど、震災前の姿に戻る復旧のイメージがあった。そのため、大槌の人から「復興と復旧が違う」と聞いて、大槌も震災前後で違うと知り、自分の持つイメージとの違いを認識させられた。また、ただの空き地に見えた場所も、防災用空地で大槌旧庁舎跡地であると教わるなどした。自分の思い込みを恥じた。そのような意味でもツアーはとても有意義だった。

私たちは継続的に東日本大震災の被災地を訪ねている。しかし、三陸鉄道の開業日に行ったとき「今日はこんなに混んでいるけど、半年後はどうなっているか」という地元の人々の会話を聞き、悲しかった。だからこそ、これからも大槌をはじめ、様々な土地を訪問することや震災の学習を継続していきたいと改めて思った。

初めて実際に現地に訪れたことで、東日本大震災の現状を実感できた。8年経過した今でも残る問題と、時間の経過で生じた問題があった。その一方で、町の人々の生活に復旧しつつある日常を垣間見ることもできた。これからも、この地域に向き合いたい。

2度目の東北訪問で改めて東日本大震災の脅威を知ることができた。今回は3月に大槌町に訪問したが、約4か月という短い期間でも鉄道が開通したり、新しい建物ができていたり復興を感じることができた。これからも通うことで考えを深めたい。

今回初めて岩手を訪れた。震災の陰を目の当たりにした衝撃があまりにも強く、思っていた以上に体は疲弊していた。津波は繰り返すということを歴史は教えてくれる。津波で苦しい思いをする人たちが現れないよう、3.11を経験した私たちには何ができるのか、4年間を通して探したい。

復興。たった2文字なのに、その意味は多様だ。「心の復興はまだまだだ。いや、もしかしたらできないのかもしれない。」と地元の方は話す。「震災を忘れたくても忘れられない」と1年前に涙ながらに話してくれた姿と重なり、たった2文字であっても心に深く突き刺さった。



7月ツアーは3回目の参加。同じ街を複数回訪れると、どうしても前来た時と変化した点、復興が進んだ点に着目してしまう。一方で、初めて被災地を訪れた者は、ニュートラルに街の現状や課題を捉える。人が入れ替わる大学生の団体だからこそ得られる新しい視点がある。

「被災地」の内外からの見方の違いを感じた。観光を学ぶ身からすれば、震災遺構のような震災の記憶は残した方がよいと考えるが、先日、旧大槌町役場が取り壊されたように、見るだけで辛い思いをされる方もいる。「風化」は本当に防ぐべきなのか、改めて考えたい。

大槌町旧役場の取り壊しや三陸鉄道の開通などの変化があった後に行く初めてのツアーであった。初めて大槌町に訪れたときは景色が変わり、震災からの成長を実感した。これからも共に成長するためにも、団体として見てきた大槌町の成長を共有したい。

震災遺構の問題に関心があるが、何を残して何を残さないのか、というのは場所によって大きく差があると毎度のように思う。「残す、伝える」と一言に言えてしまうが、訪れるたびに地元の人々の多様な感情に触れ、ひたすらに難しい問題と痛感する。

東日本きずなプロジェクト



連絡先
tmu.kzn.east.japan@gmail.com
 twitter : @kzn_pj

皆様のご意見・ご感想等
 お待ちしております。